早稲田大学大学院文学研究科紀要 第70輯（2025年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.70 (Mar.2025)

清水幾太郎における社会と個人の問題

大久保　孝　治

清水幾太郎という生涯における振れ幅の大きかった思想家にとって、一貫した関心事というものがあったとしたら、それは「社会と個人の問題」だった。ただし、問題へのアプローチの仕方は変化してきた。本稿のテーマを一言で述べれば、そういうことになる。

1．社会と個人の問題への歴史的アプローチ

「社会と個人の問題」と聞いて、ゲオルグ・ジンメルの『社会学の根本問題―個人と社会』（1917）を思い浮かべる人は多いだろう。原著が出版されたのは1917年、ジンメルの死（60歳）の前年で、それは清水が10歳のときだったが、清水は1979年、72歳のときに岩波文庫の一冊としてこれを翻訳している。「訳者後書」に清水はこう書いている、「この小さな宝石のうちに、彼の社会学思想の美しく完成した姿を見ることが出来る。また、学術的文献としては珍しく、最初の部分を除くと、小説のように面白く読める」（p.133）。清水が一番研究した社会学者はオーギュスト・コントだったが、一番愛読した社会学者はコントの死の翌年に生まれたジンメルだったかもしれない。

ただし、清水にとっての「社会と個人の問題」がジンメルのそれと同じだったというわけではない。実際、清水は『社会学入門』（1959）の中でそう言っている。「社会と個人という問題は社会学の根本問題である、と私は今も考えているが、それは、ジンメルとは少し違った意味である」（清水 1959 pp.176-7）。「少し違う」という言い方は、かなり違う場合にも使われる言い方なので、注意が必要である。念のため、清水が『社会と個人―社会学成立史』（1935）で論じた社会と個人の問題を取り上げる前に、ジンメルのいう「社会学の根本問題」がどんなものかを確認しておこう。

『社会学の根本問題』は４章構成で、第１章「社会学の領域」では、社会学の領域を「一般社会学」と「純粋社会学」（従来、「形式社会学」と呼んでいたもの）と「哲学的社会学」の３つに分ける視点が示される。第２章「社会的水準と個人的水準」では、一般社会学の例として、大衆社会の悲劇的現象（個々人の文化水準が高くても、集団になると文化水準が低下するが、この落差がどんどん拡大する）が考察される。第３章「社交」では、純粋社会学＝形式社会学の例として、「社交」という人と人との相互行為そのものを目的とする（味わい楽しむ）遊戯的な相互行

為について考察される。そして第４章「十八世紀及び十九世紀の人生観における個人と社会」では、哲学的社会学の例として、メンバーに向かって部分的機能という一面性を要求する全体と自ら一個の全体たらんと欲する部分との間の抗争について考察される。副題の「個人と社会」はこれら「一般社会学」「純粋社会学」「哲学的社会学」の例すべてにかかわるものだが、清水が『社会学入門』の中で「ジンメルとは少し違った意味である」と言ったのは、ジンメルが「哲学的社会学」の例とした、メンバーに向かって部分的機能という一面性を要求する全体と自ら一個の全体たらんと欲する部分との間の抗争のことを指している。

そうした抗争は調停不可能なものに見える。事実、ジンメルはそう述べている。「私の見るところ社会と個人の間の極めて広汎且つ深刻な闘争は、個々の利害という内容の問題ではなく、個人の生命の一般的形式の問題であると思う。社会は一つの全体、一つの有機体であろうとし、各個人を単なる手足たらしめようとする。出来れば、個人は手足として果たすべき特殊な役割に全力を傾注し、この役割を立派に果たす人間になるように自己を改造せねばならない。ところが、この役割に向かって、個人の持つ統一体への衝動及び全体性への衝動が反抗する。個人は社会全体の完成を助けるだけでなく、自己自身の完成を欲し、自己の全能力を発揮することを欲し、社会の利益が諸能力間の関係に如何なる変更を要求しようと意に介さない。メンバーに向かって部分的機能という一面性を要求する全体と、自ら一個の全体たらんと欲する部分との間の抗争は、原理的に解決し難いものである」（ジンメル 1917＝1979 p.94）。

しかし、全体（社会）がいつの時代も常にメンバーに向かって部分的機能という一面性を要求するものであるのに対して、自ら一個の全体たらんとする部分（個人）というものは近現代に固有のものである。第４章のタイトルが「十八世紀及び十九世紀の人生観における個人と社会」となっているのはそのためである。「自己自身の完成を欲し、自己の全能力を発揮することを欲し、社会の利益が諸能力間の関係に如何なる変更を要求しようと意に介さない」そういう個人というものが台頭してきたのは、そうした個人の要求をたんなる利己主義ではなく、ひとつの客観的な理想として見る近現代の人生観（個人主義）の普及が背景にある。なお、ジンメルは18世紀の個人主義を「単一性の個人主義」、19世紀の個人主義を「唯一性の個人主義」と呼んでいる。社会の分化がますます進む一方で、個人の価値はいよいよ崇高なものになっていったのである。

ジンメルの「哲学的社会学」における社会と個人の問題についてはここまでにして（われわれはこの先、何度か『社会学の根本問題』を参照することになるだろう）、清水が『社会と個人―社会学成立史』で論じた社会と個人の問題の方に目を向けることにしよう。清水は、ジンメルとは違う思考のルートを辿ることによって、社会と個人の抗争を資本主義社会に固有なものとしてとらえようとした。ここで清水が用いた社会および個人の概念は独特のものであった。「個人とは実は成員の大多数たる「中産以下」のことであり又社会とは極めて少数の中産以上の人々のことでなければならぬ。これを被支配階級及び支配階級なる言葉を持って置き換えるには果たして

無理があるであろうか。今や社会と個人との対立は根本的には階級の対立として現れねばならぬ」（著作集１　p.305）。社会と個人の抗争は、ジンメルが図式化したような構成物（全体）と構成要素（部分）との対立ではなく、構成要素Ａ（支配階級）と構成要素Ｂ（被支配階級）の対立として捉えられるようになった。量的には少数派である構成要素Ａが構成物と同一視されるのは構成物（社会体制）が構成要素Ａにとって都合よく構成されているからである。両者の間に抗争が生じるとすればそれは構成要素Ｂの側から起こるだろう。これが清水の論理である。要するに社会と個人の抗争をマルクス主義の用語を使って階級闘争として解釈したわけである。

こうした論理に立って、清水は歴史を４つの段階に区分した。第一の段階は原始共産制の時代である。ここにはいまだ社会と個人の抗争は存在しない。原始共産制社会は無階級社会だからである。第二の段階は古代および中世である。ここにはすでに階級がある。しかし、やはりいまだ社会と個人の抗争は存在しない。階級の存在は抗争の生じる必要条件ではあるが、十分条件ではないからである。「厳密に言うならば社会と個人の対立又闘争は両者がそれぞれ独立のものとして把握され且つ社会的に確立されておることが右の対立を云々するための真の要件ではないであろうか」（著作集１　p.309）。この時代の被支配階級の人々は共同体の内に完全に自己を埋没させていたのである。第三の段階はルネサンスから18世紀末に至る時代である。ここにおいて被支配階級の人々はしだいに共同体から自己を解放していく。では社会と個人の抗争はここに生じるのか。そうではない、と清水は言う。「個人が確立されていることはもはや疑うことは出来ない。しかしこれと対立すべき社会に就いては如何であるか。古きものとしての社会は勿論個人の前にその姿を消さねばならないが、他面において新しきものとしての社会もまた決して個人に対立すべき理由を持っておらなかったのではないか」（著作集１　p.312）。これまで個人をその内に埋没させていた封建制社会は崩壊しつつあり、将来個人を再び埋没させるであろう資本主義社会はいまだ萌芽の状態にある。個人に対立すべき社会はなく、あるのは個人の原理に基づく社会という理想ないし幻想であった。そして第四の段階は19世紀前半から始まる。資本主義社会はその全貌を明らかにする。それは中世の共同体よりもはるかに巨大で複雑な有機体である。他方、個人に与えられた価値は一層その重量を増していく。「すなわち社会と個人とは両者がそれぞれ社会的に積極的存在として樹立されておることを基本要件としてのみ真に対立又抗争の関係を結ぶことが出来るのであって、後者についてはルネサンスがこれを実現し又後者については十九世紀前半の現実の転化がこれを生み出し得たのである。かくして吾々は社会と個人の問題をその核心において正に歴史的なるものとして把握せねばならないのである」（著作集１　p.321）。問題を歴史的なるものとして捉えるということは、問題を永遠のもの、原理的に解決不可能な問題としてみなさないということである。それは資本主義社会が終焉することによって、つまり被支配階級（＝個人）が支配階級（＝社会）との闘争に勝利することによって、解決可能になる問題であるという意味である。少なくとも原理的にはそういうことになる。

戦後間もない頃、清水らが立ち上げた「二十世紀研究所」での講義をまとめた『資本主義社会の構造―社会体制講義』（1948）という本がある。著者は高橋善哉、今中次麿、迫間眞次郎、清水幾太郎の４名で、この中で、清水は「資本主義社会における社会と個人」というタイトルの文章を書いている。内容は基本的に『社会と個人―社会学成立史』を踏まえたものになっているが、文体は三木清の重厚な文体を意識した『社会と個人―社会学成立史』とは違って、教室での講義を文章化したもので、身近なエピソードを交えた平明な文体で書かれている。そして資本主義社会における社会と個人の関係を複雑にしている諸要因について縷々述べた後で、社会と個人の問題（矛盾）は社会主義社会においてはどうなるのか（解消できるのか）という点について触れている。

「社会主義と一口に申しましても、現在までのところでは、社会主義というものが理想的と申しましょうか、少なくとも資本主義がチャンと実現されたほど社会主義は未だ歴史上実現されていないわけであります。そこには多くの問題が残されているわけであります。しかし、近代的分化を非常に尊重しながら社会主義に到達してゆくか、あるいは、分化をいい加減で切り上げて、むしろ原始的な前近代的な集団に対する要求を満足させるような形で社会主義の方へ向かってゆくか（引用者注：民族主義的な社会主義国や軍国主義的な社会主義国のことを指している）、この二つの方向が（ママ）あるいは分れてゆくのかもしれない、というようなことを考えます」（清水　1948a　pp.275-6）。この慎重な語り口には、実際に誕生している社会主義社会への批判だけでなく、はたして理想的な社会主義社会というものは実現可能なのかという疑問も感じさせる。少なくとも『社会と個人―社会学成立史』に見られた歯切れのよさはない。

『資本主義社会の構造―社会体制講義』と同じ４人のメンバーで、同じ出版社から、同じ日付で出された『社会主義社会の構造―社会体制講義』という本がある。二十世紀研究所主催の「社会体制講義」の後半部分に相当する、２冊でワンセットのものだと思われる。清水はここに「社会主義社会における社会と個人」（清水　1948b）というタイトルの文章を書いている。さきほどの「資本主義社会における社会と個人」の最後のところで後半の講義への導入として触れられた「社会主義社会における社会と個人」という問題がこちらで本格的に論じられるのかというと、慎重な、歯切れの悪い口調は変わらない。清水は社会主義の理念や歴史についての説明にかなりの紙幅（時間）を費やした後で、次のように述べる。「長い回り道を通ってここまでやってきましたけれども、いったい生産手段が社会的に所有され、生産が意識的計画的に行われるような社会の中で、社会と個人というものはどのような関係に置かれるのか、これが本来の問題として現れて参るのであります。しかし、この本来の問題に直面するや否や、私は云うべき事が何もないのであります。と申しますのは、生産手段が社会的に所有され、それから生産が意識的、計画的に行われる。いまの場合、私にわかっているのはそれだけであります。それだけの事実から社会と個人という複雑、微妙なものが一般にどのような関係でどのように結びついてくるか、という

ことを導き出すことは私に出来ないと思います」（清水1948b　p.218）。しかし、これで講義を終わらせるわけにはいかないであろうから、この後、清水は社会主義社会における社会と個人の関係を複雑なものにしているいくつかの要素――独立変数（社会体制）と従属変数（社会と個人の関係）の間に存在する介在変数――について説明を始めるのだが、それは資本主義社会における社会と個人の問題を複雑にしている要素とさして変わらないもの、すなわち、宗教、民族、一般大衆の性格、民主主義、官僚制などである。想像するに、この講義を聴いた人たちは社会と個人の問題に資本主義社会と社会主義社会の間に本質的な違いはないのではないかという印象をもったかもしれない。そしておそらくそう思われてしまっては困ると清水は考えたのだろう、「もちろん、社会主義になってみたところで人間の不幸はやはり果てしなくあるでありましょう。（中略）社会主義の社会になっても人間は年を取るでありましょうし、病気になるでありましょうし、どうせ死んで土をかぶせられるでありましょう。社会主義になっても夫婦喧嘩は無くならないし、継子いじめも無くならないし、人間は至る処で涙を流して嘆かなければならぬ。にもかかわらず、人間の獲得しうるところのミニマムの幸福条件が、資本主義社会におけるよりも社会主義社会における方がより良く確保できるということは安んじて云い得るのであります」（清水　1948b　pp.250-1）と付け加えている。「夫婦喧嘩」云々の下りでは教室に笑いが起こったであろうことは想像に難くない。そうした雰囲気の中に当時の進歩的と言われる人たち（講師と聴衆）が共有していたであろう社会民主主義（暴力革命やプロレタリア独裁によらない社会主義社会の実現）への期待、裏を返していえば、貧困や格差を生み出す資本主義への危惧のようなものを見て取ることができるだろう。

2．社会と個人の問題への発達論的アプローチ

品治佑吉は『人生と闘争　清水幾太郎の社会学』（2024）の中で、社会学者としての清水の大きな特徴を、「彼が終戦後の総合雑誌の連載や幾度にもわたる自伝の執筆を通じて、「人生」を語る社会学者であったという点である」（同書　p.18）と指摘している。清水が自身の人生を語る社会学者である点は、品治の指摘を待つまでもなく、清水の読者にとっては周知のことであるが、品治の独創は、「清水にとって社会学とは、人々のそれぞれの人生の中の「闘争」を捉える試みであった。清水の見るところ、人々が生きるおのおのの人生は、それ自体が社会との複雑な葛藤の中で紡がれるものであり、彼は社会学を通じてそうした個々の人間と社会との関係のありさま――清水のいわゆる「個人と社会の闘争」――を多彩な手法を通じて、具象化しつづけた」（同書　p.28）という指摘にある。つまり自身の人生を語ることは、「個人と社会の闘争」という清水が一貫して考えていた主題にとって相応しい方法であったということである。

さて、ここで、清水のそうした流儀にならって、筆者と清水とのかかわりのエピソードを一つ述べさせていただく。論文というものの一般的なスタイルからは外れるが、本稿は筆者にとって

の「最終講義」のようなものなので、若干の逸脱をお許しいただきたい。

私は1977年３月に早稲田大学第一文学部人文専修を卒業したが、そのときの卒業論文は「子供と社会に関する発達社会学的研究」というものだった。これは清水の『社会と個人―社会学成立史』とその５年後に書かれた『社会的人間論』（1940）に着想を得たものである。つまり、「子供にとっての社会」というものを「子供がかかわる社会関係や集団の複合体」として考えれば、それは年齢に伴って変化していくわけで、そこに「社会と個人の問題」の変遷を見ることができるのではないかということである。卒論では、乳児期における社会（母子関係）と個人（非社会的人間）の対立の不在、幼児期における社会（家族）と個人（境界人）の対立（第一次反抗期）の発生、児童期における社会（家族＋小学校）と個人（社会的人間）の対立の潜在化、思春期における社会（家族＋中学・高校）と個人（再び境界人）の対立（第二次反抗期）の顕在化という図式を提示した。要するに社会と個人の問題の個体発生の過程を清水が『社会と個人―社会学成立史』で示した系統発生（歴史的過程）とのアナロジーで論じたものである。幸い卒論はよい評価をいただき、大学院では社会学を専攻しようと決めた。そして一年間の浪人生活に入ったのだが、予定の行動とはいえ、学部生でも大学院生でもない、ただの「街頭の青年」として社会学の勉強を続けるというのは、心もとない気分のものであった。そんなある日、私は清水幾太郎に手紙を出した。一種のファンレターのようなもので、卒論の要約を同封した。しばらくして清水から返信が届いた。

「雑用に追われ、返信が遅れて申し訳ありません。お手紙および学士論文要約、拝読しました。前者を読んで大いに恐縮し、後者を読んで大変に見事だと思いました。立派なものだと思います。似たようなテーマ――但し目的や条件はまったく違いますが――は「社会的人間論」（昭和十五年）で少し扱ったことがありますが、甚だ粗雑なもので、われながら恥ずかしいしだいです。小生、ご承知のように、あちらこちらと放浪を重ね、経済学に手を出したり、哲学に文句をつけたり、聊か身を持ち崩していますが、どうか、私のように右往左往せず、確実な研究者としての道を歩いて下さい。現在は修士課程でしょうか。修士論文完成の暁は、是非、「要約」を拝読したいものです。小生は、昨年、「昨日の旅」（『文芸春秋』）の連載を終り、昔からの宿題であるオーギュスト・コントの本の準備を進めています。しかし、なかなか捗りません。エネルギーが大分減って来たためでしょう。ご健勝をお祈りします。」

私がどんなに感激したかは説明するまでもあるまい。手紙の日付は1978年の３月４日。手紙を受け取ったのが大学院の入学試験に合格する前だったか後だったか判然としないのだが、それはここでは重要な問題ではない。重要なのは文中に登場する『社会的人間論』（1940）である。私はこの本を角川文庫版で読んだのだが、それはいまでも私の手元にあり、裏表紙の隅のところに「1976.3.3買う」と記されている。それは大学３年の３月である。購入してすぐに読んだのかどうかはわからないが、少なくとも卒論を書いていたときには『社会的人間論』をすでに読んでいた

ことになる。清水が『社会と個人―社会学成立史』で論じた「社会と個人の問題」に発達的アプローチを適用できるのではないかというアイデアは『社会的人間論』から得たものだろう。

『社会的人間論』は、子供が家族集団→遊戯集団→隣人集団→学校集団→職業集団という現代社会における一般的な所属集団の系列に沿って社会の中を移動していく過程で、個人（パーソナリティ）として形成されていく過程について説明したものである。「社会的人間」とは、本能にしたがって欲求を充足している生物学的人間（乳児がそうである）と違って、社会的な環境に適応することによって、別の言い方をすれば、集団から求められる行動様式を習慣として身に着けることによって、欲求を充足している人間のことである。社会的な環境は子供の加齢に伴って変化するので、子供はその都度、古い習慣を捨て、新しい習慣を身に付けなくてはならない。それがパーソナリティの発達ということである。これはアメリカの行動主義的心理学の考え方であり、事実、『社会的人間論』には参考文献としてキンボール・ヤングをはじめとするアメリカの社会心理学や児童心理学の本が多数挙げられている。

しかし、文庫本の解説で日高六郎はもっと深い読みを示していた。「しかし、やがて読者は、この本がただそれだけの、平板でアカデミックな「理論的」研究ではないことに気づくでしょう。（中略）氏がこのなかで試みたことは、圧倒的な超国家主義の重圧から、何とかして個人の権利を救い出したいということでした。氏はくりかえし、人間は社会によって作られるだけでなく、その人間が逆に社会を作って行く、ということを述べています」（日高1952＝1972　p.119）。日高の解説は彼独自のものではなく、清水本人が自伝『私の読書と人生』（1940）の中でそういう趣旨の語りをしていることを受けてのものである。しかし、本人がそう語っているのだからそうだと考えることは、ライフストーリー論の視点からは素朴すぎる。回想とはあくまでも回想される時点からの過去への意味付与であり、当時の意識の再生ではない。清水の回想のことを知らず、虚心坦懐に本書を読んで、超国家主義の重圧から個人を救出したいという隠れた意図を読み取ることは「読者」には無理だろう。もし「読者」にそれが可能であったら、当時の検閲官なら簡単にそれを見破っただろう。また、「人間は社会によって作られるだけでなく、その人間が逆に社会を作って行く」というのは、清水の社会学の基本的な命題（クレアタ・エト・クレアンス）ではあるが、本書の中にそれを見出すこともかなり難しい。記述の比重は圧倒的に「人間は社会によって作られる」の方に寄っている（庄司 2015）

しかし、『社会的人間論』を読んでいて、アカデミックな発達心理学の本とはずいぶんと違うという印象をもったことも確かである。全体として語り口がクリティカルで、ときに悲壮感さえ漂わせていることである。たとえば「家族集団」について。「家族集団の内部にある暗さが存在する場合、それがいかに微妙なものであっても子供に影響せぬことはまれであると言わねばならぬ。（中略）一般に他の人間の内部を洞察することができず、あるいは逆に他の人間によって自己の内部を理解されぬ場合の苦悩が問題になるにもかかわらず、真に深い苦悩は相互にその内部

を理解しうる場合に生じるものである」（著作集３　p.33）。ジンメルを彷彿とさせる哲学的な文体であるが、考察の内容は田山花袋が『生』三部作で描いたような家族の重く暗い側面である。また、大人の世界（職業集団）に参入していく手前の「学校集団」については、学校が国家権力のエージェントである点が強調される。「彼が学校集団の成員になるとき、彼は集団系列における他の極、すなわち基礎的社会としての国家から発生する力と直接に触れねばならず、その統制力の下に立たねばならぬ。もし相対立する二つの極から二つの力が生じているものとすれば、学校はこの二つの力が相接する場所であり、また従来主として家族集団の個性に従って作られていた人間が、新しい基礎的社会の個性にのっとって作られようとするところである」（著作集３ p.42）。個々の集団の背後というか背景にある基礎的社会（全体社会）がここに来てその姿を垣間見せたことで『社会的人間論』は発達心理学の域を出て、真に発達社会学になったというべきだろう。

「学校集団」の章の末尾で、清水は「なお人間が学校集団の成員である時期に、ある意味において人間が真に人間でありうる唯一の時代とも呼ぶべき青年期が訪れ、そこに興味ある幾多の問題が生じるのであるが、これについては別の著書に詳しく論じておいた」（著作集３　p.59）と注記している。これは『社会的人間論』の３年前に出版された『青年の世界』（1937）を指している。『社会的人間論』は社会と個人の関係の変化を個人の幼児期から成人期までを主要な所属集団の系列に沿って記述・考察したものだが、清水の一番の関心は「青年期」にあった。それが「人間が真に人間でありえる唯一の時代」であるからである。それはいかなる意味おいてか。「青年は既存の社会的観念を最も容易に捨て得る人々であり、またこれを捨てずにはいられぬ人々である。しかも批判は単に外部に向かうものではなく、却って自己批判こそ青年の精神に属するものであった。そして不幸なる大人達たちは生活の事実に依って自己の持つ社会的観念と真実とのギャップに気づかざるを得ない人々である」（著作集２　p.262）。ここで注目すべきは「青年」と「不幸なる大人達」が同じ位相にいる人間として語られている点である。「青年と不幸な大人達とは共に社会の内部に生活しながらその外部に立つことを余儀なくされていた」（著作集２ p.262）からである。個人の欲求を社会的な行動様式（そのシステムとしての習慣）によって満たすことが社会的人間の特徴であるが、その習慣を拒否する人間（青年）やその習慣に従って生活していても思うようにならない人生を送っている不幸な大人達は、社会不適応者として「社会の外部」に立っている。しかし、多くの不幸な大人達は背負っている生活の重さ（職業集団との関係や自ら結婚して作った家族集団との関係）ゆえに簡単には習慣を拒否することができない。彼らに較べれば青年は身軽である。ただし、習慣に従うことを拒否することによって、自身の人生を棒に振ってしまう危険もある。だから悩むことになる。

当時、清水は30歳。すでに「学校集団」は離れ、結婚して所帯はもっていたものの、「職業集団」という明確な輪郭を持った集団には所属していなかった（フリーのライターのような生活）。清

水にとって、青年や不幸な大人達について語ることは自分自身について語ることだった。『青年の世界』は書き下ろしで、228頁の本だが、通常の章節立ての構成ではなく、107の小さなチャプターがフラットに並んでいる。それは翌年に岩波文庫の一冊として清水が翻訳したジンメル『断想―日記抄』(1923) を思わせるスタイルである。いや、似ているのは形式だけではない。「解題」の中で清水は「刻々に伝えられる戦報を聴きながら、学問の精神が日を追ってヨーロッパから失われていくのを悲しみながら、そして漸く迫って来る老衰を感じながら、ジンメルはこの断片の大半を一つ一つ書いて行ったのではないかと思う」(清水 1938 pp.3-4) と書いている。おそらく青年清水は老人ジンメルに自分を重ねていた。後に『青年の世界』執筆当時の心境について清水はこう述懐している。「その夏の暑い幾日間かを費やして市ヶ谷田町の家の二階で一気に書いた。(中略)。書きながら、私は昂奮していた。私自身も一個の青年であった。何ひとつ権威や地位を持たず、ただひとり東京の街頭に立つ青年であった。解かれぬままに私の内部に横たわっていた私自身の青年期の諸問題、私はそれをぶちまけながら、しかも社会の暗い流れに向かって一種の抵抗を試み、その抵抗の底でひたすら自分を確かめていたのだ」(清水1949 著作集 6 pp.445-6)。

ここから最初の自伝『私の読書と人生』(1949) 執筆への道は遠くない。青年期や出生から成人に至るまでの人生の軌道における「社会と個人の問題」について、一般論として、しかし、背後に自身の人生経験を潜ませながら書いてきた清水が、戦後、あたかも事例報告のように、自身の人生経験を積極的に語り始めた理由は複合的である。

第一は、「終戦」によって生まれた自由な空気。これは清水に限らずすべての言論人にあてはまることである。第二は、戦時中に新聞の社説等を書いてきた翼賛的知識人としての自己を批判する文章「体験と内省」(清水 1946) を発表し、それが大熊信行 (1947) によって高く評価されたこと。これによって清水は「戦中」から「戦後」へと入っていくことができた。第三に、岩波書店 (具体的には『世界』の編集長吉野源三郎) がバックアップする「平和問題談話会」の事務局幹事として「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」(1949) の起草にあたったこと。これにより清水は「進歩的文化人」としてのポジションを得た。第四に、中年期を迎えたこと。自伝の執筆に着手したとき清水は41歳だった。一般に中年期とはこれまでの人生を振り返り、これからの人生を展望する年齢であるが、加えて清水の場合、短命な家系に生まれ育ったため (父親は49歳でなくなっている)、主観的には「晩年」でもあったかもしれない (大久保 1997)。第五に、読者からの要請。『私の読書と人生』の原型 (最初の 4 つの章) は雑誌『思索』に「読書の日記」という通しタイトルで連載されたものだが、このとき雑誌の編集者として清水に原稿の依頼を行ったのが安田武 (当時26歳) だった。安田は中学生の頃から (つまり1930年代後半から) 清水の著作の熱心な読者であった。そして編集者となった安田は清水の熱心な読者たち (社会学青年) の代表として、清水に彼の読書遍歴と人生のリアルな関係について書くことを求めたのであった (品治 2024)。第六に、新たな文体の獲得。自身の体験を赤裸々に語るためにはそれに相応しい

文体が必要である。戦前・戦中の清水の文体は三木清の重厚な文体を模倣したものであったが、清水の自伝の文体には、清水と同じ時期に生まれ、戦後すぐに亡くなった太宰治（1909-1948）の影響が見られる（大久保 2020）。もとより「私」を赤裸々に語ることは日本の近代文学の伝統だが（私小説）、清水はたんに自己を語るだけでなく、自己を語りながらその語りに茶々を入れる自己が文中に顔を出すことがある（たとえば『私の読書と人生』の「荒川放水路」の下り）。それは太宰の得意とするレトリックだった。清水は『私の文章教室』（1971）の中で、論文や知的散文を書こうとする者は先ず小説家に学ばねばならないと述べ、モデルとすべき小説家の例として真っ先に太宰治を上げている。また、創元社の『太宰治作品集』（1951）の付録として書いた「太宰治と私」の中で、「太宰君を読む人と、私を読む人とは、かなりの程度まで、重なり合っているのではないかと思う」（清水1951 p.300）とも述べている。

3．社会と個人の問題への大衆社会論的アプローチ

清水の『社会学入門』（カッパブックス）が出たのは1959年６月、つまり1949年から1960年までの12年間に及ぶ進歩的文化人としての「清水幾太郎の時代」（大久保 1999）の最終盤である。同じ年の３月に『論文の書き方』（岩波新書）も出しているが、三冊目の自伝『わが人生の断片』（1975）の中で執筆の裏話に触れている。「話を昭和三十二、三年に戻すと、その頃の私の生活は、多くの方面で行き詰まっていた。他人にどう映っていたかは判らないが、自分では、袋小路に入ってしまったような気分であった。多くの方面の一つは、経済生活で、毎日、原稿に追われたり、講演に飛び廻ったり、威勢よく暮らしてはいたが、私にとって大切な生活費であるお金が、平和運動およびジャーナリズムにとっては阿堵物（引用者注：不浄のもの）であるために、忙しさに見合うだけの収入はなかった。それに気づく暇もないような忙しさであった。或る日、その暇が生まれたのであろう。（中略）私は、よく売れそうな本を書こうと考えていた。以前から岩波新書編集部から頼まれている『論文の書き方』なら、少しは売れるのではないか。そう思って直ぐ走り始めた。（中略）平均すると、毎日半ペラ三十枚ばかり書いていたことになる。『論文の書き方』は、その年の三月に出版され、私が予想した以上に売れた」（著作集14 pp.428-9）。『社会学入門』執筆の動機も同じようなものだったと思われるが、執筆の動機はどうであれ、両著は多くの読者を得て、彼らに多くの影響を与えた。後者を読んで、社会学の門をくぐり、社会学者となった者は少なくないだろう。

『社会学入門』は東北大学での講義を元にした『社会学講義』（1948）とは違って、体系的な章構成はとっていない。第１章「社会学の本質」、第２章「社会学と社会思想」、第３章「家族」、第４章「社会学小史」、第５章「ビュロクラシー」、第６章「社会と個人」、第７章「大衆」といささかランダムな構成で、社会学のキーワードが清水の個人的な体験とともにエッセイ風に語られている。第６章「社会と個人」は本稿のテーマそのものであるが、内容はこれまでに見た社会

と個人の問題への歴史的アプローチと発達論的アプローチの知見の反復であり、とくに目新しいものはない。ただ、サルトルの発言を引き合いに出しながら、マルクス主義が集団の大海の中の「階級」を特別視していること、また人間についても「職業集団」に所属している「大人」（労働者）のことしか考えていないことへの不満を述べている点は目を引く。つまり社会と個人の対立を階級闘争（ブルジョア対プロレタリア）としてとらえるという図式の有効性への疑問である。そうした疑問は清水の中に以前から（『青年の世界』や『社会的人間論』の頃から）あったものだが、社会主義勢力の主導する平和運動の渦中に身を置いている状況では軽々に口にできるものではなかった。「その頃の私の生活は、多くの方面で行き詰まっていた」という先ほどの述懐はそういうことを指している。

『社会学入門』で注目すべきは第７章「大衆」である。「実を言うと、できることなら、私は大衆の問題を避けて通りたかったのだ。それは、この問題が一つの大きな泥沼で、これに足を踏み込むと、どうにも始末がつかなくなるからである」（同書 p.222）と清水は彼らしい言い方で大衆について語り始める。始末がつかなくなるのは、「大衆とは何か」ということを理論的に規定することの難しさもあるが、それ以上に、平和運動という実践の平面において、大衆とどう向き合っていくか、どうやって運動に動員していくかが難しいからである。従来の社会主義的な運動では、階級の概念が大衆の組織化に大きな役割を果たしてきた（立ち上がれ、万国の労働者！）。しかし、清水はそれはもう有効性を失ってきたと考える。「第二次大戦後、反資本主義的運動に関係してきた私自身の経験――専門の運動家から見れば、それはきわめて貧しいものであろうが――から見て、「プロレタリア」という言葉をほとんど耳にしていない。という事実を無視することはできない。私のような年齢のものには神秘的な響きさえあるプロレタリアという言葉は、内輪の会合でも、大衆的集会でもほとんど聞くことができない。まして、世界史的使命というものが実感をもって語られたり、また、ドッシリと前提されていたりする場所に居合わせたことがない。（中略）古典的輪郭を失いかけた階級の、プロレタリアの観念を新しく規定しなおさねばならぬ。それによって、大衆自体が新しく規定されるようになるだろう」（同書 pp.240-1）。多分に論争的な発言だが、論争には発展せず、論争はあったのかもしれないが、発展する前に眼前の60年安保闘争が佳境を迎えることになった。闘争には負けた（安保条約改定を阻止することは出来なかった）。しかし、民主主義は勝利した（強硬採決をした岸内閣を総辞職に追い込んだ）。そういう認識のズレの中で清水は運動から足を洗い、プロレタリアの観念の見直しと大衆の新しい規定という課題は放棄されることになった。

中島道男は『清水幾太郎の闘い』（2023）において「知識人 / 大衆図式」と「貴族 / 大衆図式」という２つの図式を使って清水の思索と行動の変遷を分析した。有効な方法論だが、ただし、前者は厳密には「知識人 / 庶民図式」とすべきだった。中島は清水の大衆観を論文「庶民」（1950）の中に求めているのだが、この論文の中には「大衆」という言葉は出てこない。「大衆と庶民と

の違いについては、そうこだわる必要はないであろう」（中島 p.114）ということだが、やはりこだわるべきである。当時の清水に「大衆」という語彙がなかったわけではないことは、すでに紹介した「社会主義社会における社会と個人」（1948）の中で、「一般大衆の性格」がどういうものかわかっていないと社会と個人の関係を具体的に論じることはできないと述べている（p.226）ことからもわかる。「私は専ら直接的接触の世界に住む人間の群を庶民と名づけよう」（清水 1950 著作集 8 p.294）。清水が論文「庶民」の中で「大衆」という言葉を使わなかったのは、「庶民」に寄り添って「庶民」を語るためである。別の言い方をすれば、「庶民」に寄り添わない「知識人」を批判的に語るためである。これに対して「貴族 / 大衆図式」は大衆批判のためのものである。大衆は庶民の膨張形態である。膨張を促進したものは、ホワイトカラーの増加とそれに伴う学歴や生活水準の上昇、そしてマス・コミュニケーションの発達（間接的接触の世界の拡大）である。膨張の過程で失われたものは一種のつつましさである。『社会学入門』第 7 章「大衆」は「大衆社会」で終わっている。それは大衆がたんに多数であるというだけでなく、高圧的でもあるような社会のことである。資本主義社会における社会（少数の支配階級）と個人（多数の被支配階級）の問題は、ここに至って、大衆社会における社会と個人の問題に変容したのである。

ジンメル『社会学の根本問題』の第 2 章「社会的水準と個人的水準」の中に有名な「社会学的悲劇」について述べた箇所がある。「個人は或る性質や行動様式を他の人々と共有することによって大衆を作っているのであるが、これらの性質や行動様式は価値の低いものとして現われるという現象である。ここにまさに社会学的悲劇と呼ぶべきものがある。確かに、個人が非常に繊細な、洗練された、申分のない性質を持っていることがあろう。――しかし、そうであればあるほど、この性質は他との比較を許さぬようになり、それと反対に、彼が他の人々と確実に共有し、それによって他の人々と明らかに一つの大衆を作り得る所以のものは、愈々低級な、原始感覚的な層に還元されるに至る。そのため、「民衆」や「大衆」を軽蔑の口調で語ることにもなったのだが、しかし、諸個人は、それが自分のことだと感じないで済んだ。なぜなら、事実、それは個人を指してはいなかったから。個人そのものを全体として見れば、彼は、集団的統一体の中へ持ち込んでいる性質を遥かに超えた高い性質を持っている」（ジンメル 1917＝1979 pp.53-4）。この最後の箇所、個人は自分が大衆であることを感じないという指摘は重要である。清水も『社会学入門』で大衆の性格について述べるときにこの点に触れている。モーパッサンやル・ボンやヤスパースの大衆論を紹介した後で清水はこう述べる。「こういう調子の大衆への非難や軽蔑を、案外、大衆自身が喜んで受けいれているのである。（中略）それを説明する一つの鍵は、大衆が輪郭や組織を欠いた集団であるところに見いだされる。どこから大衆が始まり、どこで大衆が終わるか、それが一向に明らかでないのである。大衆の一人がヤスパースなどの大衆蔑視の言葉を読んだ途端に、彼は、自分は大衆ではない、と考えはじめる。自分は立派に個性があるし、無責任ではない。自分が大衆だという証拠はどこにもない。そして、自分を高名なヤスパースと同じ見地に立

たせて――これはかなり気持のよいことである――他の多くの人々、とりわけ、自分の気に入らぬ人々を大衆に見立てて、ヤスパースの教えてくれた言葉を人々に投げつける。このとおり、自分は大衆を批判することができるのであるから、自分は大衆ではない。自分はヤスパースと同程度の、少なくとも、ヤスパースの見解に賛同しえる程度のインテリであり、エリートである。彼はそう考える。これは人情というものであろう」（同書 p.229）。しかし、大衆には脱大衆指向という性格があるということだけであれば、話はそれほど複雑ではない。話を複雑にしているのはマス・コミュニケーションが大衆に迎合して、インテリ批判、エリート批判を展開していることである。「ヤスパースの言葉を読んで、いち早く自分を大衆から区別し、自分を大衆に対立させた人間も、マス・コミュニケーションの甘い猫なで声を聞くと、今度は自分を大衆に見立てて安心することができる。こうして同一の人間が、或る時は自己を大衆に対立させることによって誇りを感じ、他の時は自己を大衆に溶けこませて安心する」（同書 p.231）。大衆社会における個人は自分を大衆と区別しようとする傾向と、それとは反対の、自分を大衆に同化させようとする傾向の両方を備えているというわけである。これが「泥沼」の意味である。

清水が『社会と個人―社会学成立史』で社会と個人の対立を階級闘争として捉えようとしたとき、「社会＝支配階級」で「個人＝被支配階級」として明確に区別されていた。しかるに大衆社会における個人は、あるときは大衆に溶け込み、あるときは大衆から自分を区別しようとする人間、いわば社会とその外部を行き来する「境界人」である。それは清水が『青年の世界』で取り上げた「青年と不幸な大人達」を想起させる。すわなち「青年と不幸な大人達とは共に社会の内部に生活しながらその外部に立つことを余儀なくされていた」（著作集 2 p.262）と。しかし、清水が平和運動から離脱し（1960）、さらに大衆化した大学を定年まで 9 年を残して退職して（1969）から書いた『倫理学ノート』（1972）の「余白」と題された長いあとがきの中で、大衆と個人の間のこうした往復運動が捨象された一種の静止画像としての「貴族 / 大衆図式」が提示された。「貴族」とは個人の中にある自分を大衆から区別しようとする傾向が純化された理念型であり、「大衆」とは個人の中にある自分を大衆に同化させようとする傾向を純化された同じく理念型である。相反する二つの理念型が静止画像として提示されたことで、「貴族」と「大衆」は鋭く対比され区別される存在になった。大衆社会の「泥沼」は「大量の濁った水」と「少量の上澄み」にはっきりと分離されてイメージされるようになった。話は単純化され、わかりやすくなった（なりすぎた）のである。

そして「余白」は「飢餓の恐怖から解放された時代の道徳は、すべての「大衆」に「貴族」たることを要求するところから始まるであろう。しかし、それが不可能であるならば、「大衆」に向かって「貴族」への服従を要求するところから始まるであろう」（著作集13 pp.345-6）という予言者風の語りで終わっている。しかし、はたしてこの語りはこれで完結しているのであろうか。完結したものとして読んで、違和感や嫌悪を表明している評者が多いが、大衆に貴族たることを

要求することが不可能であるならば、大衆に貴族への服従を要求することも不可能ではなかろうか。何しろ相手は大衆なのだから。つまり、この末尾の語りは、「さらに、それも不可能であるならば…」との含みをもったものではないだろうか。そして、その連鎖が行き着くところの予想される一つの結論は、大衆に何らかの道徳的要求をすることの不可能性ということである。しかし、清水はそこへは向かわず、「大衆」ではなく、「大衆になる以前の個人」つまりいまだ職業集団に所属しておらず学校集団（それも義務教育レベル）に所属している「大衆の子供たち」に対する道徳教育の必要性を説くという方向に向かった（清水 1974）。

他方で、清水は「貴族」――静止画像としての「貴族」ではなく、自分を大衆から区別しようとする傾向の相対的に強い個人――に向かって、彼らがしばしば陥りやすい「孤独」からの救済策として「社交」の必要を説いた。清水の事実上最後の著作となった『「社交学」ノート』（1986）は大学退職後の清水の活動拠点となった「清水研究室談話会」の活動（社交）の記録であるが、「社交」について語ることは同時に「孤独」について語ることでもあった。清水が自己の経験を交えて語る「孤独」には三種類ある（大久保 2024）。第一は、「社会関係の消失」としての孤独。それまで持っていた社会的役割や社会関係の消失がもたらす孤独である。第二は、「仲間外れ」としての孤独。相互行為をする人たちの傍らにいてその相互行為から排除されている孤独である。そして第三は、「孤高」としての孤独。たんに日常生活の平面で周囲の人たちから距離を置くだけでなく、より高い平面を目指して、現状からの脱出を図ろうとする、そうした立体的な構造を有する孤独である。

「私は「社交の勧め」という意味で、この小さな本を書きました。（中略）私たちは、一人残らず、それぞれの「孤独」に苦しんでいるのです。私の言う社交はこの辛い淋しい生活を、ただ胡麻化すのではなく、多少なりとも有意味なものにする、一段でも二段でも自分を高める、少数ながら信頼出来る友を得る、そのための機会、そのためのスモール・グループのことなのです」（清水 1986 pp.5-6）。つまり大衆社会における個人、すなわち大衆から自分を区別しようとする人たち同士のコミュニケーションとしての社交を論じているわけである。ここでもまた清水はジンメルを引き合いに出し（『社会学の根本問題』第 3 章「社交」）、「この章は、ひとつの文学作品のようなものであります。こういう文章は、ジンメル以前の誰も書きませんでしたし、ジンメル以後の誰も書いておりませんし、また誰も書けないであろうと思います。しかし、この「社交」という章を読んでおりますと、これは読書や思索という通常の研究方法から生まれた成果ではあり得ないということに気づきます。それよりも、ジンメル自身の社交の深い経験、それが根本にあって初めて書けるものだということが判って来ます」（同書 pp.23-4）と述べている。「他の誰にも書けない文章」という点は、清水も同じである。ジンメルとの違いは、自身の「深い経験」（人生）を語るか語らないかにあるだろう。

マルクスやコントやデューイが清水に与えた影響についてしばしば言及されるほどには、ジン

メルが清水に与えた影響については言及されていないように思われる（庄司武史『清水幾太郎異彩の学匠の思想と実践』は数少ない例外である）。本稿は「社会と個人の問題」に対する清水のアプローチの変遷を主題とするものであるが、「清水とジンメル」という興味ある主題についても示唆しておきたい。

参考文献

＊清水幾太郎の文献からの引用にあたっては、『清水幾太郎著作集』全19巻（講談社, 1992-3）所収の場合はそこから行った（巻と頁を示した）。また、引用にあたっては、旧かな・旧漢字などは読みやすさを考慮して、適宜、新かな・新漢字に改めた。

大久保孝治，1997,「自伝の変容――清水幾太郎の三冊の自伝――」,『社会学年誌』38号，pp.103-120.

――，1999,「忘れられつつある思想家――清水幾太郎論の系譜――」，早稲田大学大学院文学研究科』第44輯第1分冊，pp.133-148.

――，2007,「清水幾太郎における「庶民」のゆくえ」,『社会学年誌』48号，pp.103-126.

――，2019,「清水幾太郎における文体の変遷」,『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第65輯，pp.17-32.

――，2024,「清水幾太郎における孤独と社交」,『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第69輯，pp.93-108.

大熊信行，1947,「戦争体験としての国家」,『思索』春季号，pp.21-59.

清水幾太郎，1935,『社会と個人―社会学成立史（上巻）』刀江書院（著作集1所収）.

――，1937,『青年の世界』同文館（著作集2所収）.

――，1938,「解題」，ジンメル『断想―日記抄―』岩波書店，pp.3-5.

――，1940,『社会的人間論』河出書房（著作集3所収）.

――，1946,「体験と内省」,『朝日評論』6月号，pp.20-30（「戦争の経験」と改題して『人間の再建』白日書院1947所収）.

――．1948a,「資本主義社会における社会と個人」，二十世紀研究所編『資本主義社会の構造―社会体制講座』思索社，pp.211-77.

――，1948b,「社会主義社会における社会と個人」，二十世紀研究所編『社会主義社会の構造―社会体制講座』思索社，pp.201-52.

――，1949,『私の読書と人生』要書房（著作集6所収）.

――，1951,「太宰治と私」,『日本の運命とともに』河出書房，p.300.

――，1959,『社会学入門』光文社.

――，1971,『私の文章作法』潮出版.

――，1972,『倫理学ノート』岩波書店（著作集13）.

――．1974,「戦後の教育について」,『中央公論』11月号（著作集17所収）.

――，1975,『わが人生の断片』講談社（著作集14）.

――，1986,『「社交学」ノート』ネスコ・文藝春秋.

庄司武史，2015,『清水幾太郎　異彩の学匠の思想と実践』ミネルヴァ書房.

ジンメル，ゲオルグ．1917＝1979，清水幾太郎訳『社会学の根本問題』岩波書店.

――，1923＝1937，清水幾太郎訳『断想―日記抄』岩波書店.

中島道男，2023,『清水幾太郎の戦い』東信社.

日高六郎，1952＝1972,「解説」，清水幾太郎『社会的人間論』（角川文庫版），pp.116-20.

品治佑吉，2024,『人生と闘争　清水幾太郎の社会学』白水社.